

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

農民懲戒録全



東京大学
経済学
80
611



農民懲戒録

鈴木為蝶軒

とき人同世の大郡多々中に飢饉に越
たれ^{飢饉}憂^ひはれ^し古き^き王^王和漢^{和漢}ふ^ふお^おて^て教^教乃
有事^{有事}な^なづ^づい^いふ^ふ人^人の^のふ^ふひ^ひあ^あき^き昔^昔々^々
とて^{とて}今^今ふ^ふれ^れ事^事の^の様^様に^に心^心と^と遠^遠ひ^ひ味^味と
忘れ^{忘れ}農^農業^業に^にあ^あり^りう^うう^うと^と年^年月^月銭^銭
う^うと^とた^たれ^れふ^ふ思^思ふ^ふべ^べと^と天^天明^明三^三卯^卯年^年に^に至^至り

天変及び国東の國々奥列並に飢饉と
なり人馬^{たて}餓死^うたたり有様^{ありさま}法^し人^{ひと}及
見^み及^及聞^き次第^{しだい}なり小^こ所^{ところ}に通^とり自^{みづか}分の^{ぶん}家^け
内^{うち}に及^{およ}び飢^うる小^こ所^{ところ}の餓^うる小^こ所^{ところ}に眠^ねる人^{ひと}と号^{なづ}か
れたる人^{ひと}と多^{おほ}く兼^{かみ}て沙^さの^の罪^{つみ}改^か政^{せい}儉^{けん}約^{やく}
小^こ心^{こころ}外^{ほか}農^{のう}事^じも格^{かく}別^{べつ}者^{もの}情^{なさけ}の許^{ゆる}に聞^きゆる可^べ
又^{また}其^{その}後^{のち}年^{とし}月^{げつ}を去^さに随^{したが}ひ飢饉^うの困^く苦^く

と忘れ或^{ある}時^{とき}代^{だい}と違^{ちが}ふ人^{ひと}少^{すく}く後^{のち}に老^{おい}年^{とし}
死^し亡^つを年^{とし}若^{わか}の輩^{たぐひ}飢饉^うの艱^い難^{なん}の首^{くび}領^{うり}
ハ名^なを不^ふ実^{じつ}受^うけたりと考^{かんが}へる心^{こころ}に懲^{おそ}むる完^{かん}
子^こ近^き年^{とし}に至^{いた}りて是^{この}年^{とし}の飢饉^う乃^{すなは}ち大^{おほ}穀^{こく}と
ナリ人^{ひと}となき事^{こと}今^{いま}時^{とき}年^{とし}若^{わか}く者^{もの}
并^ひ女^め童^{どう}の輩^{たぐひ}ハ及^{およ}びたるともいふべき世^よの
中^{なか}に教^し誡^{かい}を人^{ひと}も小^こ心^{こころ}なりけり年^{とし}月^{げつ}

坊小島、注新小全、成り其間に又も
近年天変多し山作きき飢饉うへた々何と
して死命は法なく金にやうにたふさ
れ飢饉の憂事、能慮たも人間の甚
危きものと考へる農業に心を用ひ
る事、要也米穀、旬節其外何
ふようにも食糧を成へば物を希る財宝

事、人同世の一、人の如きこと事、誠まことと
事、も教諭、たふ三年飢饉の困
苦の事、坊見聞、たふたふと記して傳へ
られ、心をきき、此意と辨へ、食糧の
乏しき人、排食にや、妻子、進も、交、聞、せ
他人、心、も、教、戒、あ、ら、う、幸、ひ、な、う、
一、古、く、重、飢饉の憂、い、る、者、一、生、年、曆

と考ふ家小近事れ三四拾年遠く五六
拾年の中ふたれ多紀事ふれ疎く
思れ慎みく今より心改め農業一節
彙略なる毛頭能く有金かき上古
飢饉乃年曆詳ふと近く世の人
中囑め年止る事きたのう先寛永
十九年年飢饉其後延宝三年飢饉

い年教三拾四年又享保十七子年飢饉此年
教九拾七年又天明三年飢饉此年教
九拾七年より百年た間移り例とて
改め世乃中注所ふと家々同世の
大憂移りと思れや慎む金匱の一大
事と此遠慮止るより天明三年乃
飢饉と此の候貴ふとに過り年

月定子四振年余成行謀先法如矣
より同小近年少と都計飢饉のうきめ
眼前ふん然あり何計の苦患た云々
な地事悲れも飯少と忘る處か
天明三年の飢饉と同東いふも未
大飢饉と云ふ處か先秋の突法も少
宛有之沙救年穀也とあり女救の

難穀も事左食絶て餓死するもの
是人も能く飯と眞品遠くして
乃大飢饉中食物に乏一斗も能く
馬大猫の肉と食しこれに於て一命を保
つて或は三拾年の電救或は四五振年
電救を村に与へて一命を保つる
人死すて亡所となり今終る目と

志一何多^う歟くめぐる族^{やう}の内ある山道氏
 の任人高山彦太郎と云人奥州巡^{まわ}見^みに
 所と云^い証^{しやう}傳^{でん}する飢饉の後上品新田部
 伯^{はく}と疑^{うたが}ふも何^{なん}と云^いと耳^{みみ}に入^いたる
 所何^{なん}程^{ほど}の飢饉といふテ程^{ほど}のり有^あ
 の食^けと何^{なん}と云^い事^{こと}は是^{こゝ}小^こ越^こするが^がみ
 志^し一^い何^{なん}多^う歟くめぐる族^{やう}の内ある山道氏

通し小山深くゆみ通ひた紙夾の冠義乃
解りもき案にち登り山の麓を見渡
せば山相不のふ人家錢ん出—心收びてそ
山の弟も紙押分てやう—と林に下りそ
人衆をみれば思ひや其里ふ人志人も折
田畑の記をが—た数草む—となり傾く
新小むぐ—とよと家の内を深行橋と

法に依りて其間く人自肯散礼志す
有候方の毛も立く目とあられ思ふ
其に馳ゆ人其に及れ尋れた其近邊に
道と居てやうに常居とたげ死に
尋あつ里人其小きりお初る人の其地と成
心安んた其地此邊近も聞たる其地
よりと又其場とて今も尋るたる事なり

其相違なり事と成るなり大飢饉
の思ふ一糸代ひても散るなり
事なり

一天明三年凶作飢饉夏吳の冬も其
寅年の冬も重なる常なり先寅年
十二月至く暖氣はち其種採意花咲
却る筆採け暖氣なる事三月迄の如く

雲上村より雷雨夜に發し大坂にてハ
市城門下松月雷辰涉焼失有并代
未聞乃天變詠人忌時と思ひと作一
年一脱小言より外年の事小好れハ同冬に
引留く解室甚浦晴天稀小して陰雨
多り小言より例年小好れ留るの如く
元収九月田植乃小至れ解室退る

皆人錦入と為て火通不奇程の寒冷をま
詠國一統五穀の相場を由小成来れたる
一 年穀物有るものと密に賣拂ひた
金清の通用宣文と已と脱び目送る脱
七月小成れ信丹清る山火物さんえ震
室より来 物より山上乃火燃ハ空と霞ハ
雷電物より二三拾星の間を圖叔と作り

雲灰と分たゞ定焼と消え去らうすま
より伝く泥土降ト火石と飛
次方く小雷電震動いやまー皆人
膽と消魂と飛一爰うくのう
目送系其間流るのう山われ泥土
物及押お一橋二三里のう火石と飛
四橋五程砂石流ふト一又山水押出ふる

勢い恐ろしきもの云詭小絶つ事のは
其中小幅三間計長廿拾三の大石と流る
押出流る一敷う中に道拾三と押流
漸止り此石全群火石と飛く中に煙立
流るる水の草木皆大石た小勢ひ流る
成れ共同三の大水を敷と限りもか
押おす勢いあまふ筋の材敷五拾三村

一吋三押流——家敷千七百八拾三軒人別
 三千七百七拾八人死亡又其外牛馬不敷知
 中に幾多金村岩木村横尾村松尾村川原
 村に五ヶ村横幅拾八町笠巻屋中其の深サ
 三丈或人余乃新泥と變ト此水敷人馬
 死亡未ダお分り難し後所有一言乃其
 外事と決り所押流——其の第拾八ヶ村

溺死たづねの人馬是又殺るゝおろの色ハ血乃
 やく泥ろの大熱湯と變たれたれ主流に
 ぬる者一命銭と思ふ致して横死一扱
 六月上旬と九月下旬とあると陰雨降濤
 之間毎小交多し過と砂降り式雨小交と
 自み毛ぬまゐる有たむ云切目新願あら
 うとい片一日茂收晴く毎の曇り陰

手勝中目と送系二百十日小にふる目
或りと廿寅の大風多う二夜三日吹た
依はるまゝ詠作のふかしの福穂は五
たれらむ事なく場所小まなむ
水は実入福けりた敷の陰雨寒氣
痛と見えてなる元味常ふす氣味
且時と生はぬあぐくだけ安く上も下と

飢饉の大難此節に止る野草動蕪歎云詠月所
の世とふまゝ依之下生る者ハるびの根草根
野老の如く目く小堀九枝食と解 栗林
あふみ指の実解の実と外草木の根葉
この人間の口小入るとた小園時を何ふと
す能毒も論せむ食して命は法と有
様となり 如此千辛万苦心力は破るも

いふ世上一統大義を左一統一義の階級
の通用して人々危く見えたれば諸國所
領主地畝方々、又農家穀田となり
津野南部今津津澤三真越後常陸國
八品一統穀田となり、何れ全義賦たる
者にても他領主穀田を實求るものなり其
領分切の金用にて飯合隣村に親類縁者

有之といへ他領の者も食料の金用切に
涉る分に於て町方穀田の年穀もその
味も改め有る返る年穀減拂底にて
甚老き車、年買入た甚度多う、年穀
と調ふ車減望く制禁、又年買と、
町方者小給者云々ため小寺村の名主
役人其百姓の家内人別と改買年の非収

赤城書付小謬切手紙源屋等の台沙下系
 有之と切手と穀屋見屋と一穀賣
 源作法と云う但切手紙以多穀調上
 る者も走人分代三百文限り一穀丁お後
 方沙下系付金沙所持者とも一穀多
 分手小入事と云ふるも毎かく村没く
 の切手と云て穀屋の店小市と云ふ

家々の老人小兒病老振の難治と一述
 穀賣人た愁訴の事矛盾かゝるもの甚
 小と云ふは穀割の因ひと云ふ事なり
 一此店系穀諸食不並後自他及圓系の上
 増と云ふ化す

代金三万
 月新

南郡津經三春
 米貳俵 五合
 余俵 八合

代金 五万五千

日新

日新

日新

日新

日新

日新

新米 七斗

水戸 新米 七斗

大田 新米 七斗

新米 七斗

新米 七斗

新米 七斗

新米 七斗

浅田 又

日八 又

代法 松六 又

日四 松八 又

小麦 穂 又

穂 穂 穂

大根 又

大根 又

右 外蔵の 新米 新米 新米

本の実野 粟 食米 用 用 用

あれ 又 又

一奥品過大飢饉の村々より少くも穀
下直なりと聞及上所は家内不残粒も小
おれ者夥しと相違ふ中に金沙粒多き者
是求食敢りて母に沈み寒く心辨れ病へ
たり上遠路の勞れに大へて山崎村小
河の里より例れ死せる者も多くにれども
何國の難と云ふ事も未れを尋問し居る

と云くは小島新の食と云ふ事ありと云
たれりたて武老飢したへ兼首とくつて井戸
川より代投親と捨子代捨死せる者多く
或もたふさき小兒小乳とありて母も食の
所の上より乳味は通せば小兒は飢て母
の乳房を喰切或も父の股を喰け柱か
りやくぬきゆく云々此極長持の類に押入

死と侍多九拾ふる——又年たあつる
者戎飢ふたへ兼恤のいふも取失ひ流業と
流び館主地元の城下町居る下町掉来
大妻を養——法外のおむれとね——町
家穀屋も戎別勢にお破多矣——世に
一統に流るるの後に成るお珍勤ふといふ
——或る村でも所有者の家六太

勢押入別勢云れの押借とね——或る
盗賊小入文り流るる旅人戎殺——金流と
奪元衣類やもね九礼法お極の人情と
なれば事——云流り流るるも也恤の産
なれば事流るるの心ねく小人窮るる礼と
成すことと聖賢の見え通——少あふる部
成誠と思ふ——

一人々生涯なま右小記ス所の飢饉大郡有年一
忘る處うへば毎日食小向ふ時々々
代思ふべし此誠ある時々自強と天道の
神意小計い非余の死ととも思われ
大飢饉のする時々妻子あんぢく一食
得るは思ふべし此一とるは思ふべし
いづる人々たゞ命幸ひふして生涯飢饉の苦患

小あはれは格窮とよめられず困窮つら暮れば
悪心發り決小非余の死とも思ふべし
右卯年の前年當領の此事一計救ふ
穀の由りて是も武も兼ふのたふし禪武も
名主又ハ組頭の働と以て食正代配と武も
年穀賤同々有之者々至死とせしめ友救
の意いと見ゆり被是の仁光よりて人

我飢饉と云々名々思ふに小な事毎日常の
と云々此れ毒の背云々辨れ常に行て
不食不食日減まる令止せられ終つて食
毒の病と發一翌辰年小至りて多病死
人多く聞ゆ令止む非常の乃小一令減ふ
事多し速速のかり有と云てやばと飢死の
憂と曰ふと云々人々小と云と云

あふ人等用ふ能ふ穀云々不及此等の
賜に恵み心減りた人有り毎年秋
乃末小至り星草の刈りたる云々の事
不殘于上刈拾つる草の葉を集め女童
の手と添へもみくだき煮く干し其葉紙
紙の代り多々入金湯に煮出ると云々授け
手入小と用ひ数年多々賜金飢饉の名

に至りし此下葉乃財止中して難飯子文
て教日と清き大なる助と成且多氏小と
施つと相國もい軍革小限と奉小あて
憲く食毒小なりとぞして長と財用心と
成る金と下と多なる金と遠く慮^{おもんばか}るに付い
近き憂もと登人の明教思に成り然ふ
愚なる者も先の奉りたるの心と用ひ

沙の云々小目と送る人而人小あてと云
奉りたる一者も多に見えおる多と
肉少なる一食代はととくに握る金
ととみ飢たたる所の財と成なり金
如き思ふ小奉物の靈長たる人間と生れ
なづと飢饉の憂あると辨へる金と用
心とねく家業に多の奢り小長と空

月日と送るも亦たも忘るべし云々云々
能く是ともよし云

一享保十七子年西國一統大飢饉の甚路
例れ飢死せる者多し申す人
此の因り腰の物失くぬ並に死骸
左取のものも死骸と改る人
金百両有
小掛と有るもの金百両に付く食と求る

能く立なぐりて小一飯を得る事不能飢死
小及ぶ見えたりは疎小ありし云々
如是凶年小通ふ時金百両行はれ
獨り金百両行はれ
通ふ事然れ金百両世の金有り中計の
宝あり
思ふ
而も金百両有る事
飢死

は思われ有候べし。飢饉の餓死は
速なり。と思ひやれ。是は仔細の國
松山の人は山より老弱を場へ出さ見聞
あり。是も諸君若年の時聞きたる事也
然るに尚世の人情只金銭を重む。米穀食
料を一年宛に儲け出さるゝとの意は
大切なり。農業産業を成しなれば、

飢饉の天罰有る事。に成らず。但し
いせの中、飢饉の事。を忘るゝと。只
農業に勤て。天意を背く。是れ
目々月々に。慮恐れ。仕む。事。肝要
事。穀。人間に。助。養。した。め。天。を。敬。む。
天地の恵みの人恩。なる事。は。老。若。を
何れ。心。付。ば。農業。に。嫌。ひ。有。り。急。ぐ。風。俗

小成りかれば天罰の山に育る事
に及んばと後世に憂ひ思ひて之を記する
所なり是と身中の人々中ふふ所の農業
五穀の云々も程と判りて了る

一書物の程程とと辨ふ處も又能く事々
所々農業全書一都代調(宮崎安貞翁
四拾年来心力と勞したる志)のるに

事々辨(一頁)京先生月意の志とつて
農業全書(佐々木附録)に「つる米穀麦
の作付に據ある事々辨(米穀の事々
讀聞七教諭)志に「つる米穀の事々
辨」

一頁原先生の日と事々天の人と事々たる小
生とる穀物と事々といふ事々中人間

生養の爲と見ふれば二種有福と麦と稻の
福と秋実法より其の初と人と其より福
なり麦を亦るる時分麦又一換ふ者
買ふの中秋迄人民の食と稻り又麦秋の
間粟稗黍蕎麦大豆小豆稷豆稻の
穀物有て福麦たりぬ助と成る天道の
人と其より福と減小能有ともいふや

破る小児生れて食ふ事なりと認る母の食
物と乳と稻りて是と其より子生長して
其母又子供らるる乳の時ハ其乳より次の
子も養ふ成る是ハ其乳に類ハ類なり類
有る数皆是ニツあり角は其より其より
は其より角なり是より人より生類の
長なり其より其より其より其より其より

自云也如天の福——妻——と類と答に
立穀は皆人の為よきと云ふ事と云ふべし——
右の内福と妻と云ふ他の穀は穀に類したる室
おる屋への春秋と云書とある——
小倉福と妻と云ふ穀は此二種の損亡
人間大損なる災なり農人たる人
との能く天の福と作するに類する

天意は交々福と妻とと作る小其類を
そ——カは用ひる——是則農民天道は
高き乃ち——と命と保ち福とと更なる
なりと云ふたる

此書黒羽沙家津珍本を據るに
百姓者心掛る事なり是れ也

少る二三村宛に中へ合を寄る手帳を
小茶園女子法廷にも名を宅上呼集
能讀いものと相対し成る讀乃る
い書と通ある。之は心掛は授可
中へ合は去々年来法穀為余り
左田畑作のふる産米勿論豊なり
といふ五列を今より一老有之候

相聞る其心は遠く穀物に程下直で
も新云之者より一丈食掛屋の
去全減有る者及飢波邪義の
心掛は来より一は合村没金中へ合
農業波書格は授是より中へ合
右之通村より可法お解以上

寅二月

那奉行

明治十八年十月十七日寫之

上古山村
野口龜造

東京大学経済学部図書館



5509418249